

阿部要一著『源流一物語・興亜石油』、『源流一続 物語・興亜石油』

稲葉, 和也
徳山大学経済学部ビジネス戦略学科

<https://doi.org/10.15017/13814>

出版情報：エネルギー史研究：石炭を中心として. 21, pp.113-117, 2006-03-22. 九州大学附属図書館
付設記録資料館産業経済資料部門
バージョン：
権利関係：

【書評】阿部要一著

『源流―物語・興亜石油』、『源流―続物語・興亜石油』

稲葉和也

1

二〇〇五年五月二一日経営史学会西日本部会において「戦後における興亜石油の企業活動―外資提携から新日本石油精製への合併まで―」の題で報告する機会を得た。その後、興亜石油に関して『エネルギー史研究』への投稿依頼があり、興亜の足跡については、私の報告をするに当たって触発された著作があり、この本に対する書評を是非書かせていただきたい旨をお伝えした。今から一〇年ほど前の書籍について書評を書くということは、通常の書評形式とは多に異なるものであるが、以上のような経緯で前記二冊を紹介したい。

『源流―物語・興亜石油』と『源流―続物語・興亜石油』（前者を『源流』、後者を『続源流』と表記）は、興亜石油株式会社が発行した、ユニークな社史であり、非売品である。加えて現在興亜石油は存在していない。このような書物入手することは一般的に困難ではあるが、大学図書館等には大部分寄贈されているため、読むことは可能である。

ここでユニークな社史と紹介したが、『源流』・『続源流』は著者である元興亜石油阿部要一氏が独自の視点から一人で執筆したものである。社内の内部資料を利用し、関係者への聞き取り調査を行いながら、事実を一つ一つ明らかにして自己の解釈を加えながら取りまとめられたものである。そのため、興亜石油の歴史について確かに語られたものであるが、およそ社史とは呼べない出来栄であり、むしろ阿部氏の思考の過程が表現されていると述べた方が良いものとなっている。

例えば、『源流』の書き出しは「広大なロシア大陸の東端に接し、宗谷海峡をはさんで、あたかも日本列島を吊り下げるように延びた、南北千三百キロの細長い島がある。サハリンという。かつては、樺太と呼ばれていた。島の中央を東西に国境線が走り、北はソ連領、南は日本領であった。戦前のことである。樺太の冬は、厳しい。」（『源流』一〇頁、改行省略）といったものであり、社史とは必ずしも思えない文体で書かれている。

元々この『源流』・『続源流』は『興亜ニュース』と呼ばれる社内報に連

載された記事であった。社員の結婚や出産、お悔やみなどの情報、社員表彰などが掲載される中で異彩を放つ内容の濃い文章が載っている。これは、執筆者である阿部氏の書く力に因るところが大きい。彼はこの時期社内報における記事の執筆だけを仕事としており、昼夜逆転した生活で執筆に没頭していたという。このような勤務形態を認めた興亜石油の態度も驚きという他ない。また、内容については、阿部氏の想像力や推測も加えて、必ずしも興亜石油にとって好ましくない解釈や事実も多く述べられている。通常の社史であれば、自社に不利であったり、批判的な内容については極力記述することが避けられるのであるが、『源流』・『続源流』はむしろそのようなものこそ会社の原点を探る大切な要素だとして取り上げられている。このような「社史」は、適任者が存在し、様々な事情や機会が重なって偶然生まれたものなのかも知れない。

刊行の辞で代表取締役会長野口昭雄（当時）が以下のように述べている。「企業が、自らの歴史を扱った読み物としては一種奇妙な出来栄えになつていると考えます。しかも、この物語は、会社自らが企画し、最初から最後までひとりの社員が書き上げたものです。社史の類であるという性格上、多分に自画自賛的な記述にならざるをえない点は致し方ないところでありますが、それにしても、事実を徹底的につまびらかにし、それに筆者自身の個人的解釈を加えながら書き進めるという作業は、企業においては、単に個人の覚悟や才覚だけでできることではないだろうと考えます。この本の出来栄えというより、このような本を産み出した興亜石油の自由で闊達な社風や文化に私自身は最大の喜びと誇りを感じています。」（『源流』、一～二頁）と。

2

『源流—物語・興亜石油』目次の構成は、刊行の辞、第一部第一章北樺への決別、第二章土佐の武士、第三章バンカラ、第四章出会い、第五章群像、第二章第六章創業、第七章鶴見工場、第八章初荷前後、第九章奮闘、第十章苦闘、第十一章辛酸、第三部第十二章航空揮発油、第十三章決心、第十四章買収、第十五章会津の藩士、第十六章横浜製油所、第四部第十七章執念、第十八章一元合同、第十九章麻里布、第二十章興亜石油、第二十一章建設、第二十二章爆焼、である。

『源流』では、創業者野口栄三郎が三菱銀行を辞めて、北樺太石油の支配人に就任し、創業メンパーとなる薄井久男らと出会う時代から始まる。当時石油会社を立ち上げることが今でいうベンチャーを創業するようのものであったことがわかる。当然のことながら新参者に対する妨害や様々な困難に直面する。『源流』はこの時代に会社を創業することの苦労をよく伝えている。

一九三〇年に東洋商工株式会社（翌年東洋商工石油株式会社）が創業される。しかし、設立当初は製品の販売に苦勞し、販売面の弱点を克服するために一九三四年梁瀬商事に資本参加してもらっている。その後、経営危機から一九三七年には日本曹達株式会社の子会社となる。これが縁で陸軍とのパイプが出来、当時まだ珍しかった航空揮発油製造計画を立てて日本興業銀行から命令融資を受けることで、山口県の和木町に陸軍燃料廠と隣接した麻里布製油所の建設工事が計画される。その後、日曹コンツェルンの業績不振から日本曹達が経営から撤退して、一九四一年興亜石油株式会社に社名を変更する。一九四五年五月九日に工場が完

成するが、皮肉なことに翌日の一〇日にB-29爆撃機の編隊による空爆を受け、工場設備は壊滅的な打撃を受ける。『源流』の話はここで終わる。

次に『源流―続物語・興亜石油』目次の構成は、序章たとえ病むとも、第一部第一章廃墟、第二章特殊燃料油、第三章戦争保険、第四章玉音放送、第二部第五章雌伏の始まり、第六章目黒事務所、第七章「パーマライト」、第八章東興とユニオン油脂、第三章第九章操業禁止令の解除、第十章カルテックス、第十一章提携交渉、第十二章元売放棄・精製專業へ、終章別れるとき、である。

『続源流』においては空襲後から始まる興亜石油の企業活動が取り上げられる。完成したばかりの製油所が米軍の爆撃を受けて生産設備が壊滅状態にあった興亜石油は、戦前陸軍と結びつきが強かった点や精製を始める前に爆撃されたため、石油会社といっても名ばかりの存在であった点、国内における販売網が脆弱であった点など様々な不利な条件を抱えての出発であった。

『続源流』から分かることは、日本における石油会社の中で興亜石油は、復興において一番困難を極めたのではないかということである。より正確には製油所再開の条件が他社との比較の上で一番苦しいものであったことが読み取れる。事業を再開するための条件としては、製油所の復旧、原油の調達、技術の導入、外資系石油会社に対する信用力の向上、資金の確保、販売体制の再構築などがある。戦後の日本における石油会社を外資系、民族系と一般的に分類することが多いが再開に漕ぎ着けるまでの条件によって分類し、どのようにして困難な条件を克服して製油所の再開に至ったかを考察することも重要な視点の一つである。国

内他社との比較の上で精製所再開の条件すべてが不足しているのが興亜石油であった。国内石油会社の外資との提携は結果として「カルテックスと興亜石油、日本石油精製」、「スタンダード・ヴァキューム（スタンバック）と東亜燃料工業」、「ライジング・サン（シエル）と昭和石油」、「タイトウオーターと三菱石油」、「ユニオンと丸善石油」となるのであるが、米英石油会社との交渉において興亜石油は一番後回しにされた。そもそも興亜石油が交渉相手に選ばれたのも日石との提携契約を進めていたカルテックスが新たな需要先として交渉中の丸善石油との交渉に失敗したからである。そこで残っていた興亜石油を代役として交渉を進めるに至ったというものであった。この辺りの事情については『続源流』で詳述される。しかし、日石が同じ出所の石油を国内で販売競争することに拒否反応を示し、カルテックスに対して独占的販売契約を要求していた。この日石との契約のために興亜石油はカルテックスと提携する場合に独自に販売する権利を失うことになり、販売権のない精製專業の会社になることを強いられるのである。しかし、製油所を再開させるという最重要課題を解決するために元売りを返上するという苦渋の決断を興亜石油は受け入れることになる。『続源流』では、この会社の未来を決定付けた精製專業への過程を丹念に取り上げている。

『続源流』では、カルテックスによる五〇%の資本提携を選択する内容に記述の大部分が当てられているが、提携後の事業活動についてはほとんど触れられていない。私はこの理由について著者である阿部氏に疑問をぶつけたことがある。彼の話では「カルテックスとの資本提携が興亜石油の戦後の企業活動を決定付けた。そのため詳細に取り上げたが、それ以降は『源流』のテーマとしてはそれ程重要なものではない」との

主旨の答えであったと記憶している。カルテックスとの提携については、当時の関連資料のみならず、事情を知る当時の役員等への取材、取締役会の議事録による事実の発掘、日石側の事情を知るために脇村義太郎先生への聞き取り調査など、研究者ではなかなか入手困難な資料や証言を集めて事実を掘り下げている。そして、著者が思いつく一つ一つの疑問を順番に取り上げて思考を巡らし、事実が解明されていく。このような記述の仕方であるため、時間的に前後したり、行きつ戻りつ本人の思考の過程に沿って記述が進んでいく印象を受ける。阿部氏自身は「岩を素手で一枚一枚剥がしていく思い」『統源流』、四八四頁）と吐露している。

3

戦後の興亜石油の企業活動を理解することは、国内石油会社の戦後の足跡について一企業を通して理解を深めることである。日本の石油会社が外資提携を選択したと簡単に表現することはできるが、戦後の不利な状況の下でどのような交渉がなされていたかを解明することは意義がある。また、日本の石油会社が国際競争力を持ち得なかった理由や現在の置かれている状況がどのようにして生じてきたのかなどの疑問に答える上で、戦後の外資提携によって生じた米英石油会社による日本の石油産業や市場への支配 (control) 体制が重要な論点の一つであり、これらの疑問を解く上で『源流』・『統源流』は格好の史料ということになる。興亜石油では『源流』とは他に社史として『興亜石油六〇年史』(興亜石油六〇年史編纂委員会、興亜石油株式会社、一九九六年)を同時期に編纂しており、こちらはこちらでオーソドックスなスタイルで丁寧に作ら

れている。興亜石油の事業史を客観的に取り上げるのであれば、こちらの社史を参考にすることになるのであるが、主観的な視点で書かれた『源流』・『統源流』は「社史」という枠組みの中で事業史を明らかにする実験をしており、その可能性を確かめている。両方併せて読むことで興亜石油の事業史を多角的に把握することが出来るのである。

私は興亜石油に関連して「戦後における興亜石油の企業活動―外資提携から新日本石油精製への合併まで―」、「地域と企業―山口県コンビナート関連企業を中心に―」、徳山大学総合経済研究所(徳山大学総合経済研究所モノグラフ9)、二〇〇四年、一―三三頁)を書いている。これを書いたのは、コンビナートの形成史を研究する過程で『源流』を読み始め、同書に触発されたことが理由である。『統源流』が外資提携による元売り返上、精製専門の時代で終わっているため、三井石油化学コンビナートが誕生した時に他の石油会社と同様に石油化学産業への進出の可能性が興亜石油にもあったはずだということを確かめたいと思った。また、二〇〇一年に旧日石三菱の完全子会社になり、その後合併して新日本石油精製株式会社となるが、何故このような事態に至ったのか、知りたいと考えたのである。

私の論文は外資提携以降の興亜石油の足跡について、社名が消えて新日本石油精製への合併にまで至った過程を『統源流』の続きとして取りまとめたものであり、魅力的な社史『源流』・『統源流』の「注」に当たるものであると考えている。『源流』を読んで興亜石油に興味を持った読者が必ずその後の興亜石油の足跡について知りたいと思ひ、その時に参考となるものであろう。私自身もそのことを充分に意識してまとめた。その証拠に文章の最後には「興亜石油は新日本石油精製へ『合流』した

のである」と書いたのである。

最後に『源流』・『続源流』及びその後の合併に至るまでの事業史を概括すると、興亜石油は東洋商工石油時代から、梁瀬商事との資本提携、日本曹達による子会社化、陸軍の後ろ盾による製油所建設のための興銀融資と社名変更、戦後カルテックスとの資本提携、そして、新日本石油グループへの吸収合併と常に外部の協力者と資金を利用しながら名目より実を取ってきた会社であった結論づけることが出来る。これは、新興企業である同社が創業以来取ってきた経営戦略的特徴でもあった。

（興亜石油株式会社、一九九四年、五〇三頁、一九九六年、四九三頁、非売品。）

いなば・かずや 徳山大学